

# 動詞識別テストとしてのテアル構文の有効性について

坂本浩\* 畠山真一 加藤恒昭 伊藤たかね

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

## 1. 客体変化/客体移動動詞の識別テストとしてのテアル構文

我々は動詞の意味概念を、主観を排しなるべく客観的なテストに基づいて抽出することを目指している。本稿では、状態変化や位置変化を表す他動詞を識別する手段として、テアル構文を利用する方法について論じる。

テアル構文は、原則として他動詞について、動作主による意図的な行為が完了した後、対象に何らかの結果状態が残ることを表す構文とされている。よって、はっきりとした結果状態をもたない次のような接触・打撃を表す活動他動詞には適用されないと見られている(影山(1996: 186))。

(1) a. \*ひざが蹴ってある。

b. \*お父さんの肩がたたいてある。

他動詞「蹴る」や「たたく」は対象に対する接触のみを表し、対象の変化を含蓄しないため、テアル構文は不適格となる。これに対して、対象の状態変化や位置変化が含まれる動詞はテアル構文が容認される。

(2) a. 門のそばに木が植えてある。

b. 絵の具を混ぜてある。

他動詞「植える」は動作主の働きかけによって、対象である「木」が「植えられた状態」へ変化したことを意味し、他動詞「混ぜる」は、動作主の働きかけによって対象である「絵の具」が「混ぜられた状態」へと変化したことを意味する。

ただし、状態変化を意味すると思われるような動詞であっても、次の例にあるように非意図的な動作主を含む活動においてはテアル構文は不適格となることがわかっている。

(3) a. \*新雪が山頂をおおってある。

b. \*闇が街をつつんである。

したがって、たとえ(2)に見られるように動作主が統語上に現れていなくとも、テアル構文が容認される文では背景化された動作主が存在していると考えられる。

(4) a. 門のそばにわざと木が植えてある。

b. わざと絵の具を混ぜてある。

(4)のように、「わざと」という動作主志向の副詞を挿入しても文全体の意味が自然に通るということは、背景化された意志的な動作主が存在していることを示唆するものである。

以上のことから、テアル構文で容認される動詞は、

意志的な動作主  $x$  が対象  $y$  に働きかける他動詞で、かつ、

その働きかけによって対象  $y$  がなんらかの変化を受け、その結果ある状態  $z$  にあるような意味を持つ動詞と考えることができ、これは次のような語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure: LCS)を備えていると捉えることができる。<sup>1</sup>

(5) [x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT z]]  
上記のLCSにおいて、[x ACT ON y]は  $x$  が  $y$  に直接働きかけを行うことを示す。[BECOME [y BE AT z]]は  $y$  が変化し  $z$  という結果状態や結果位置にあることを示す。CAUSE は上位の働きかけ事象が下位の変化事象を引き起こすことを示す。

テアル構文に現れることのできない動詞は、たとえ上位の働きかけ事象を備えていても、下位の変化事象をもたない動詞であると考えられる。

我々は、テアル構文に出現可能な動詞が(5)のようなLCSをもつと仮定した上で、多数の動詞を識別するテストとしてテアル構文を利用しようと考えた。ただし、テアル構文が動詞の意味概念識別テストとして客観性を備えるためには、テアル構文の適格性に関して、複数の日本語ネイティブスピーカーが同じような判断結果を示す必要がある。我々はこの点を確認するためにテアル構文の適否に関してインフォーマントに判断を依頼した。<sup>2</sup>

## 2. 第1回調査

我々は、動詞ごとにテアル構文の容認可能性を調べるために、次のような質問を準備した。

(6)【客体変化/客体移動動詞を識別するテスト

(バージョン1)】

「Vしてある」という形をとることができますか。

a. できる

<sup>1</sup> ここで、意志性が動詞の意味に関与するかどうかという点が議論の余地のあるところだが(杉村1996)、本稿ではこの議論はひとまず措き、意味述語ACTがとる項  $x$  には意志的な動作主がくと仮定しておくことにする。

<sup>2</sup> 今回行った2回の調査は、動詞1000語を調査する本調査の前に行った予備調査である。また今回の2回の予備調査ではともに複数名のインフォーマントに調査を依頼したが、本稿では2回の調査に共通するインフォーマント4名の結果を分析し報告する。

- b. できない
- c. できないことはないが不自然

テアル構文のもつ前述の諸特性から、上記テストにおいて、状態/位置変化を表す他動詞は a に、その他の動詞は b または c に振り分けられることを予測した。

このテストは、言語学を専攻している日本人大学院生をインフォーマントとして行った。広範囲にわたる種類の動詞から 90 語を選び出し、それぞれの動詞について (6) に示した質問に回答してもらった。その際、答えのアルファベット (a, b, c) だけでなく、判断に用いた例文も回答用紙に記入してもらった。調査に用いた動詞は以下の通りである。<sup>3</sup>

(7) 調査に用いた動詞

- a. **知覚・感覚・思考**: 思う, 知る, 信じる, わかる, 望む, 思い出す, 覚える, 考える, 疑う, 願う, 見る, 感じる, 痛む, しびれる
- b. **主体移動**: 走る, 向かう, 越える, 戻る, のぼる, 増す, 落ちる, 離れる, 出る, 冷める
- c. **客体移動**: 沈める, 降ろす, もらう, はずす, 付ける, 入れる, 暖める, 固める, くれる, 送る
- d. **活動(自動詞)**: 通う, 眠る, 笑う, ふるえる, 輝く, 光る, 涼む, 遊ぶ, 暮らす, ほえる
- e. **活動(他動詞)**: 書く, 会う, 振る, 引く, 打つ, 踏む, 抱く, さする, 押す, 噛む
- f. **主体変化**: 死ぬ, 変わる, 始まる, 枯れる, 生まれる, 隠れる, 集まる, 曇る
- g. **客体変化**: 折る, こわす, 預ける, 直す, 重ねる, はめる, 作る, 置く, 隠す
- h. **状態**: 似る, 見える, 違う, 連れる, 似合う, まさる, 面する
- i. **再帰**: 着る, 脱ぐ, かぶる
- j. **姿勢変化**: 座る, 立つ
- k. **言語活動**: 話す, 答える, 叫ぶ
- l. **受身的動作**: 待つ, 受ける, 慣れる, 残る

インフォーマントに対して提示する動詞は、こうした分類名を掲げることはせずに提示順序をランダムにした。

我々は調査前に以下のような予測を立てた。

- (8) テアル構文が適格になるとと思われる動詞  
 客体移動動詞 (c), 客体変化動詞 (g)

<sup>3</sup>各動詞の分類は暫定的なものであって自明のものではない。ただし説明の便宜上、本稿の中では従来から言われている「活動動詞」や「変化動詞」という呼び名を使用することとする。

テアル構文が不適格になるとと思われる動詞  
 知覚・感覚・思考動詞 (a), 主体移動動詞 (b), 活動自動詞 (d), 主体変化動詞 (f), 状態動詞 (h), 姿勢変化動詞 (j)

テアル構文は不適格になるとと思われるが実際の判断は難しそうな動詞

活動他動詞 (e), 再帰動詞 (i), 言語活動動詞 (k), 受身的動作動詞 (l)

にあげた動詞では 4 人全員が a を選び、にあげた動詞では 4 人全員が b を選び、にあげた動詞では、多くのものが a 以外を選ぶが、b と c の判断は割れるのではないかと予測した。

調査後、主に次のような結果が得られた。まず、テアル構文に出現可能と予測した動詞 (8) は、ほぼ予測通りテアル構文を容認した。ただし、「くれる, 送る, 折る, 壊す」の各動詞はテアル構文を容認しないとするインフォーマントがいた。「くれる, 送る」は a を選んだものがいなかった。「壊す」は a を選んだものが 1 人しかいなかった。

次にテアル構文に現れないと予測した動詞 (8) も、ほぼ予測どおりテアル構文を容認しなかった。ただし「覚える, 願う, 越える, 眠る」の各動詞において a を選んだインフォーマントが各動詞 1 人ずついた。

最後に a 以外を選ぶが b と c で割れるだろうと予測した動詞 (8) に関しては、予測どおりだったのは「会う, かぶる, 叫ぶ, 慣れる, 残る」の 5 つの動詞のみであった。ほかの動詞に関しては予測と異なり、a を選んだインフォーマントが少なくとも 1 人はいた。「書く, 振る, 引く, 押す, 着る, 脱ぐ, 話す, 答える, 受ける」の各動詞は 2 人以上のインフォーマントが a を選択した。特に「話す」は 4 人とも a としていた。<sup>4</sup>

### 3. 質問文の見直し

予測と差が生じた部分は、テアル構文の性質に関していくつか見落としていた点があったからだと思われる。

まず、テアル構文は眼前に結果が残存している場合が最も容認されやすいので、状態/位置変化を表す動詞であっても、ものが消滅したり崩壊したりするような、結果状態を眼前に認知しにくかったり、存在状態から非存在状態へと移行するような変化動詞(「壊す」など)は、テアル構文を容認しにくいようである(寺村 1984)。また、動詞が要求する人称(または話者から見た立場)によってもテア

<sup>4</sup>「引く, 押す, 受ける」に関しては客体移動動詞とみることできる。

ル構文の適格性は変わるようである(杉村 1996)。「くれる,送る」はこの点が問題になっていると思われるが,今回の予備調査ではこのことを示唆するにとどめる。<sup>5</sup>

また,動作主の活動が対象に働きかけることを意味する活動他動詞(主に接触・打撃動詞)が対象の名詞句次第でテアル構文を容認したり容認しなかったりするといったことが見られた。(6)の質問ではこのように目的語によって差が生じることを考慮していなかった。

動作主の活動は表すが対象変化はもたないだろうと思われた動詞が多数テアル構文を容認しているという結果に関しては,我々の重要な見落としがあった。

すなわち,テアル構文には受動型(「Y(対象)がVしてある」と能動型(X(動作主)がYをVしてある)があるのだが(益岡 1987, 2000),(6)ではこの点をまったく考慮に入れていなかった。たとえば「ポットに湯が~~入~~れてある」という表現は湯がポットに存在するという眼前に認知可能な結果状態を意味しており,これは「ポットに湯が入れられている」という受身文に置き換えることができる。これは受動型テアル構文である。受動型テアル構文が適格となる動詞は,動作の結果状態が動詞の意味概念として備わっている動詞だと思われ,(5)のLCSを備えた,我々にとっての識別対象の動詞である。さらに受動型テアル構文は,「ポットに湯を~~入~~れてある」のように,対象を提示するガ格をヲ格に置き換えても適格である。ヲ格で示すことのできるテアル構文を能動型テアル構文と呼ぶこととする。能動型テアル構文は結果状態の残存というよりは,動作主の準備動作としての行為に焦点が当たっている。したがって,結果状態を含んでいるとは言えない動詞でも能動型テアル構文なら容認してしまう可能性がある。たとえば,「(彼は)ジャケットを~~着~~てある」という文を容認する話者がいた。しかしこの場合,ジャケットを着ることが何らかの準備動作になっていることを表すのみであって,ジャケットの結果状態を描写するものではない。つまり能動型のほうは対象が変化した結果状態を必ずしも含意しているわけではなく,引き続き生じる事態に対する準備といったいわば「動作の結果効力」のみを表示しているだけである。実際,「\*ジャケットが~~着~~てある」というガ格での表示は不自然なので,「着る」という動詞が(5)のLCSを備えているというように判断することはできない。

こうしたことから,次の点に留意して質問を考え直すことにした。

目的語によってテアル構文の容認度に差が出る場合があること。

能動型テアル構文にしか出られない動詞があること。以上のことを考慮に入れ,調査をやり直した。

#### 4. 第2回調査

第1回調査の反省点を考慮に入れて(6)の質問を次のように書き換えて,再びインフォーマント調査を行った。(9)【客体変化/客体移動動詞を識別するテスト

(バージョン2)】

「XをVしてある」という形をとることができ,かつ同じ動詞を用いて「XがVしてある」という形をとることができますか。<sup>6</sup>

- Xに入る名詞句がどのようなものであっても,この形をとることができる。
- Xにはいる名詞句がどのようなものであってもこの形をとることができないか,「Xを」または「Xが」のどちらか一方の形しかとることができない。
- Xに入る名詞句によって「XをVしてある」と「XがVしてある」の両方の形をとることができたり,どちらか一方または両方ともとることができなかったりする。

上記(9)の質問を,第1回の調査と同じ動詞を用いて同じインフォーマントに対して行った。今回の調査結果からは次のことがわかった。

1回目の調査では活動他動詞の判断が,インフォーマントによってかなりばらつきであった。それはある傾向性を見せるとは言いがたいばらつきであった。しかし2回目の調査では,活動他動詞でa(受動型も能動型も容認する)が選ばれた動詞は「書く」と「噛む」だけで,そのほかの動詞は,bかcのいずれかになった。「書く」は4人ともaを選択していたが,これは,筆記されたものが話者の眼前に残存することをイメージするためであろう。「噛む」は1人だけaを選択していたが,歯型の残存をイメージしたものと考えられる。これ以外はbかcになっていたの,これは第1回目の結果とはかなり異なる点である。

「引く,踏む,振る,打つ,押す」には4人中3人がcの回答を与えた。あるインフォーマントは次のような例文を付している。

<sup>6</sup> ここでは本来,受動型のみを抽出すればいいのだが,「XがVしてある」という言い方のみで例文作成を限定してしまうと,Xが対象なのか動作主なのか不明になってしまうため,質問上で「必ずガ格になるもの」という限定はしなかった。

<sup>5</sup> 第2回目の調査でもこれらの点は未解決のままである。テアル構文を用いても識別できない変化動詞は他のテストで識別することにした。

- (10) a. ガスを/が引いてある . 人目を/\*が引いてある .  
 b. ブレーキボタンを/が踏んである . 手続きを/  
 \*が踏んである .  
 c. ドレッシングを/が振ってある . さいころを/\*が  
 振ってある .  
 d. 釘を/が打ってある . 碁を/\*が打ってある .

このインフォーマントは , 目的語の名詞句に関係なく能動型のテアル構文は容認するが , 受動型のテアル構文は名詞句によって容認度が変わると判断しているようである . これは動詞の意味が上位の働きかけの事象しか有していなくとも , 名詞との組み合わせで変化を表現できることを示唆するものである .

さらに注目すべきは , 前回の調査ではほとんど無条件にテアル構文を容認した客体変化の動詞が , やはり名詞句によっては容認できない場合があるという判断が目立ったことである . たとえば「直す , 重なる」といった動詞は , 前回の調査では全員テアル構文を容認していたが , ヲ格とガ格の両方を条件に加えた今回の調査では , 目的語によって判断が変わると考えたものが半数以上を占めた . 調査に付された例文は総合すると次のようなものであった .

- (11) a. { パソコン / 寝癖 / バンク } を/が直してある .  
 b. { 本 / 皿 / れんが } を/が重ねてある .  
 (12) a. { 気分 / 誤り / 服装 } を/\*が直してある .  
 b. { 交渉 / 失敗 / 罪 } を/\*が重ねてある .

やはり , 眼前に認知可能な結果状態があると判断できるか否かによって , 受動型テアル構文の容認度に差が出るようである .

ただし , 状態変化を表す他動詞で , 受動型テアル構文と能動型テアル構文の両方をまったく許容しないと判断したインフォーマントは「壊す」の1名を除いていなかった . これは , 目的語を選べば必ずテアル構文を作ることができるということである .

これに対し客体移動を表す動詞はさらにばらつきが増した . 1 回目の調査では , 「くれる , 送る」だけがテアル構文を不適格としていたのに対し , 2 回目の調査では受動型を受けつけないものが増えて , 「くれる , 送る」のほかに「沈める , もらう」に b の回答を与えたインフォーマントが現れた . これは , 眼前認知の関係と人称制限が働いていると思われるが , 今回は詳しい分析は見送る . ただし , 典型的な客体移動動詞 ( 「入れる , 降ろす , 付ける」など ) は問題なく両タイプのテアル構文を容認した .

調査結果をまとめると次のようになる .

同じ名詞句に関してヲ格とガ格の両方の出現可能性を問うたことにより , 活動他動詞がテアル構文を無条件で許容することはなくなり , b か c に割れるようになっ

た .

客体変化/客体移動動詞は , 1 回目の調査よりもばらつきは増した . ただし客体変化動詞では , 無条件でテアル構文を排除する回答 b を選んだものはほとんどいなかった . 活動他動詞が b と c で答えが割れたのに対し , 客体変化動詞は a と c で答えが割れた . 客体移動動詞は典型的な動詞以外では , ばらつきが増した .

目的語に入る名詞句に様々な可能性を認めることで , 動詞によっては名詞句の意味内容に応じて結果状態を明確に表したり表さなかったりすることがあるとわかった . たとえば , 接触・打撃を表す動詞は目的語の名詞句によっては結果状態を表しうると言えるし , 逆に客体変化/客体移動動詞であっても , 目的語の名詞句によっては必ずしも結果状態を含意しないことがあることもわかった .

## 5 . 結論

単にテアル構文の適否を訊ねるだけでなく , 受動型と能動型の区別 , また目的語による判断のゆれを加えることで , 結果状態の残存を意味する動詞をより狭い範囲で見つけ出すことには成功したと思われるが , 一方で , たとえ結果状態が残存していてもこのテストには通らないものがあるという逆の結果も生じた . また , これ以外の構文的特性により適否が左右される場合もあるようである . これは , テアル構文のテストだけで , 動詞に変化事象が備わっているかどうかを見ることに限界があることを示唆している . すなわち , このテストに通ったものは変化事象を備えていると判断していいが , このテストに通らなかったからと言って変化事象を備えていないとは判断できないということである . 動詞の変化事象を適格に捉える他の客観テストを模索することは依然として我々の大きな課題である .

なお , 本研究は東京大学 21 世紀 COE プログラム「心とことば 進化認知科学的展開」の研究費によって行われた .

## 参考文献

- [1] 影山太郎 (1996) 『動詞意味論 言語と認知の接点』くろしお出版.  
 [2] 杉村泰 (1996) 「形式と意味の研究 テアル構文の2類型」日本語教育 91 号.  
 [3] 寺村秀雄 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版.  
 [4] 益岡隆志 (1987) 『命題の文法 日本語文法序説』くろしお出版.  
 [5] 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版.